(五日夕刊)

磐城新聞

休刊 大祭日 第一日曜
定價 壹枚二錢、壹ケ月五十錢、郵税十錢
廣告料 一行五十錢 指定廿錢增
發行兼編輯印刷人 蓮沼龍輔
發行所 福島縣平町田町拾六 磐城新聞社

戯曲 放蕩者の死(二)

池上登美路

――(間)

(森の中から悲鳴が上つてすぐ靜かになる

――(間)

(木影から三人が拔刀の儘出てくる、寅吉が大分ふくらんで見ねる、財布を片手にして居る)

寅吉。あれがやつぱり死つて野郎だよ。何々たいぼれいくせにすばしこかつたからな

政吉。どうだい、その財布の中味は、天からの授かりものだ、いくら位ある

寅吉。そうそう、勘定をして見よう

(三人は財布から出して、數へる)

寅吉。あゝぞ〜小判ばかりで三百兩だ

定吉。ばかにあるもんだな

政吉。世間の奴らあい俺達を馬鹿だ〜と云つて居るが、馬鹿ぢやあない。こんな幸運が天からさづかるんだもの

寅吉。與留だ、こうして樂々と俺達の手に入つたのだから、俺達も樂々と使かをうじないか。

定吉。そうだ、これから先は、飲や歌へで暮せるんだ、たゝいに飲もう、たほいに歌はう

寅吉。だがまてよ。兄弟達、俺達は北の町へ行くと、酒屋で云つて來たらう。そこで今から歸ると北の町へ行つてこない樣に思われるだらう、どうしても、今夜、たそくか、明日でなけりや、俺らの町へ歸れねえ譯だらう。

政吉。かまいはしねよ。北い町へ行く途中で、死つて野郎に行會つてそこで殺ろして來たと云へばいゝじやないか

寅吉。だが、それより明日歸つた方が町の奴等ば、よけい信じてくれるせ。それに今から歸へつて、この金を見られて見ろやどでも良く云はれねえ俺達だ、きつと泥棒したかも知れねえ、なんて云ふだらう、なあ、定吉、お前はどう思ふ

定吉。俺は寅兄いの話の方が良いと思ふよ

寅吉。そうか、政吉はどうでね定吉もあへいつて居るから、明日歸ることにしようでねか

政吉。そうかい、じや明日歸ることにしよう

寅吉。そうか、よしそれじや祝杯を上げなくちやならねね、誰か酒と肴を採つてこなくちやならねさうだ、籤を引こう一番短かいのを引した者が行くことにしよう

定吉。じや、此處で飲むのか

寅吉。そうだよ、惡いかい

定吉。惡くは無けれども――

政吉。俺は飲むんなら何處でもいゝや

寅吉。そうかい、ちや籤を作るよ

(寅吉が草を引きぬいて籤を作る、三人が一所にそれを引く、一番短いのは政吉

政吉。俺に當つたよ

寅吉。そうかい、濟まねえが、行つて來てくんな

(政吉退場)

寅吉。たい、定吉、俺達は兄弟の樣に互に助けあふことを誓つて居るが、相談に乘つてもらはなくちやあならねね事がある

定吉。どんな事なんですかい

寅吉。それはな、政の奴が行つてしまつたしそこで相談と云ふのは、考がへて見ると相談ひとつで、この金が二人切で分けることが出來るんだが

定吉。だが、政の奴が居るからには出來ないことじやないかい

寅吉。そこさ相談と云ふのは、政の奴を殺っしちまふんだ

定吉。え、殺らす?

とら吉。そうさ、殺してしまふんだよ。いゝかい奴が歸つて來たら、お前と奴がいつも角力を取る樣に今度もそこで角力を取るんだ、奴だつて角力好きだから相手になるだらう。

定吉。うむ、そうしてどうするんだ。

とら吉。お前と政のやつが角力を取つて居る間に、俺が後からぶつゝりと殺つてしまうんだ、どうたうまく行くだらう

定吉。大丈夫かい

とら吉。大丈夫だよ、金がほしかつたら、その位の事は何んでもなかろう

定吉。じやぬかるな

とら吉。安心しねね

(――間――政吉德利三本と肴の包を持つて登場)

政吉。兄弟達今歸えつたよ

とら吉。やあ、御苦勞だつた

定吉。早かつたな

政吉。うまいぐわいに、すぐ見つかつたからよ

定吉。どうだい、政吉兄い一つ角力を取つて腹をすかせては

政吉。良からう、やつて來い

(定吉、政吉の兩人立上つて角力を取る――間――とら吉立上つて政吉の背後にせまり、拔劍して政吉を殺すや、定吉が拔劍してすばやくとら吉の脇腹を殺す。政吉は一言もなく倒れる)

とら吉。(脇腹をおさえながらくるしみつゝ)ち、ちき畜生!裏切りやがつたな(とら吉は定吉を追はんとして、そのまゝ倒れる)

定吉。ウハツ、、、、俺の勝利だ、ハツ、、、、さてゆつくりと一盃やらうか

(德利を取つて、飲むたちまち苦悶を起してのどをおさへながら)

定吉。毒だ、毒を持つてやがつたんだな。

(苦悶しつゝやがて倒る)

(日暮れて次第に暗くなる)

――幕――

小説 死を超ゆる者

三上於菟吉作　布施平八郎畫

(129)

若い者の時代 (六)

「今度の君の計畫の樣にすら〜と事が運ぶのは珍らしい」と主人は言つた

「で、主腦者は君以外どんな人達ぢや?」

「他の方面では實世間に經驗のある方に助力を願ふ事になつて居りますが、大体の方針は私が立てゝ大學出や高等師範出の特志家に共力してもらつて共々平生の理想を實行して行きたいと考へてます」

「馬島君が君のやうな青年に大事業を任せたのも偉いが引受た君も偉らひ、昔一切の事業が青年の手にあつたのだ。現代になつて青年は却つて隱忍して陰の事をやるやうになつてゐるが……やはり時代は青年の意氣に依つて突進させられければならんのだ」

老主人は少壯時代の健闘を思ひ出したやうに昂然と眉を擧げて言つて、頼もしさ氣に勇を眺めた

「だが、あんたは何だつて東京へ歸る早々、私達や櫻木の姉さんを訪ねなかつたのでせう」

と老夫人は不安氣に言つた。

「私達はどれほど待つて居たか知れませんよ。和子さんなぞは……」

「私は皆さんにお眼にかゝりたかつたのです。どんな處でどんな生活をして居る時にも、決して忘れは致しませんでしたが、總て時機を待つてからと考へたのです」と勇は答へた

「勇君は賢かつたのです」と櫻木はやゝてらつた磊落さを以て言つた

「若し勇君が、今度のやうに男らしく世の中へ乘出さなかつたならば、私達は世間へ對しても公に歡迎する譯にもゆかなかつたらうから……」

和子と妙子は不明さうに櫻木氏を眺めた。村越は頗る意味ありげに口をはさんだ。

「それは櫻木さんの不明の結果です、勇君がどんな境遇に落ちた場合にも、飽く迄信じて疑はなかつた人間も幾人かは居るのです」

妙子は村越の方へ目を輝かして感謝の眼を送つた

「ほんとうに私の不明の結果さ」

と櫻木はてれ隱しにやつと笑つた

けれどもこの話しをつゞけるのは內輪同志とは言へ勇に對して禮儀外れのやうに思はれたので男爵は傍らから云つた

「開院のお祝ひの日にはわしも是非よばれて行きたいものだ。その上此の頃にはお家の長男もケンブリッチから歸つて來る事だし……」

と彼は云つて樂さと淋しさをなひまぜたやうな微笑をもらした

「だん〜若い者の時代になるわい。時に村越君は前途をどう定めたな?」

村越は牛伸びた髯をひつぱりながら天井を睨むやうにして答へた

「私も人並に文官か外交官

芳醇無比
白馬の雪
松本德一吟釀
電話(平)七五二

廣告

平町紺屋町
藤沼醫院
電話五〇七番

主任 牛久
平紺屋町

賣地
商店向宅地 貸地
好間村大字上好間字忽滑六十一の一(好間郵便局隣)
間口十一間半 奧行八間 九十二坪
一、西隣縣道に沿ひ好間郵便局
一、近く好間尋常高等小學校に
一、古河鑛業株式會社好間豎坑前の好間軌道停留所隣に位し、古河會社は目下數百萬圓を投じ新斜坑開鑿中、近く着炭すれば人夫入込多く大々有望地

急告
毎度御ひいきに預りまして有難ふ御座いました、皆樣御機嫌よく御過し遊ばされ誠に悦ばしく存じ上ます。扨て弊店儀昨今の不景氣に鑑み人氣回復の策として再び開業當時の職人を招き本日より「天ぷらとカキフライ」を始めました、從前より一層勉强致します一度御試食の上倍舊の御引立を御願ひ申上ます
十月廿五日
平田町 やぶそば 電話四番

入院隨意(自動の便あり)
X光線 外科專門
平南町
上田外科醫院
電話一二九

貸地廣告
平町郡役所より税務署附近の新開地に五百餘坪の貸地があります、然かも完全な土盛でありますから流失其の他の憂ひ絶對になく商店、諸工場並に高級の住宅地として最もの適地を極く安値にお貸しいたします
御希望の方は電話なり戴けば社員が御伺ひして親しく御相談に應じます
小名濱商事株式會社
平出張所
電話 六〇三番 五四一番

內科、小兒科 市原卯太郎
外科一般、婦人科 市原陸郎
外科、梅毒、淋疾 皮膚病 市原三三男
平町田町本通
市原醫院
(入院隨時)
電話一一四番

石炭ノ特賣
當店小賣部開設三週年紀念トシテ特賣致シマス
磐城炭礦一等塊炭
正味 十貫目 金六十錢
炭價ハ日ニ日ニ向上致シマスガ今回特ニ金六十五錢ノ品ヲ金六十錢ニ値下致ス次第デス
◎目方ノ正確 ◎品質ノ優良 ハ當店ノ特色デス
電話二一三七番
配達ハ一俵ヨリ致シマス
平停車場前
ツ 阿部石炭商店

大阪賣店
平町五丁目角
山野邊藥局

美味滋養・品質本位
蜂ブドー酒
美酒禮讃
芳醇無比の美味
保健强壯の滋養
一杯は一杯より
元氣健康を增す

合資會社 近藤利兵衞商店

歴史の古い 一番
品質の良い 一番
ヒゲタ醬油
緊縮!
先づお台所から!
風味がよくて 割がきく
經濟第一の ヒゲタ醬油
景品附大特賣
十月二十日より
九升詰一樽御買上毎に
萬歳味淋(約三合六勺入)壜詰一本呈上
本數に限りがあります
どうぞ賣切れにならぬ中に
御近所の酒醬油店からお買上を乞ふ
宮內省御用達 銚子醬油株式會社

鳴かず飛ばずの 石城の勞農黨

三ツ巴の混戰地帶に在る 平署不斷の警戒

大山郁夫氏を盟主とする極左系の勞農黨が結黨式を擧げたので平署では石城郡地方に潜伏してゐる極左分子の活躍をそれ〲警戒してゐるが、石城郡に於ける極左分子は數名を數へるだけであり、而も其の中心人物が何れも不在なので中央の結黨式に應じて直に活動を開始するとは見られないが、此の極左系の分子は常に巧妙なる戰術のもとに各自連絡をとつてゐた今迄の例から見て全く無氣力のものとして放任して置く事は出來ず、警察當局が眼を光らす所以も茲にある譯であるが、石城地方に於ける勞農黨支部は同黨が解體後新黨組織準備會と名打つて郡山地方と密かに連絡をとつて活動してゐたと傳へられ、新黨結黨に依つて此の準備會が正式に孤々の聲をあげるとすれば極左系の社會民衆黨支部 中間派の 日本大衆黨支部それに此の勞農黨が加はり石城の無産政黨は三派鼎立の形となるが自黨以外の凡ての政黨に對して勇敢にも排擊をなし抗爭を續ける極左系の出現に依つて無産政黨間に於ける泥試合が行はれる結果になり、從來全く鳴りを靜めてゐた極左系勞農黨員の今後の活動は頗る注目されてゐる

女に裏切られた 片輪青年絶命

去つた妻の名を呼びつゝ 秋深き賤が家で

(既報)悲しき不具の青年が失戀の結果、厭世自殺を遂げた——石城郡好間村大字下好間字大舘七四阿部仁三郎方同居人萬年筆行商人長谷川清松(三一)は十四歳の時磐城炭礦藤原坑に從業中不幸にも機械に觸れて右手をもぎ取られ生れもつかぬ不具となつた。それ以來は前記の阿部方に引取られて寂しい月日を送つてゐる中同郡湯本町上町佐藤ヨシノ(三二)と戀に落ち本年一月から同棲してゐたが、女は二月頃から清松を嫌ひ出し、同月中一寸用達しに行つてくると云つて出て行つたきりゝ行方不明になつてしまつたので、清松は極度に悲觀し行商しながら行方を尋ねてゐるとヨシノが福島にゐるといふ事をきゝつけ、手紙をやつてみたが返事がないのを悲しみ、去月二十九日阿部方でストリキニーネを嚥下して自殺を企て三日午前三時頃遂に絶命した

精神異狀男

待合室で盜む

石城郡玉川村魚行商人鈴木辰雄(三八)が四日午前三時三十分頃郡山驛待合室で列車待合せ中生柿を包んでゐた風呂敷包みを何者かに窃取されたが午前九時ころ同待合室で一人の男が懐中から柿を一個づゝ取り出し待合室で頻りに賣りつけてゐる擧動不審の者を構內巡査が發見取調べると前記の犯人なること判明した同人は新潟縣新津町三星鐵太郎(四三)で精神に異狀があるらしい

四倉資格者

五日より閲覽に

四倉町の衆議院並に町會議員選擧名簿は三十一日作製を終了五日より十五日迄十日間閲覽に供す等選擧人數は衆議院千四百十五人町會議員千三百五十七人なりと

平署が大童で 交通安全宣傳

五日の交通安全デーを ビラ數萬枚撒布

平警察署では今五日の交通安全デーに當り町役場、土木監督所、消防組、自動車協會平支部、自轉車組等と共力して皆々安全を計る處あり町の辻に交通巡査を配し左記の如き宣傳ビラを自動車で管內全部に配布した

一、御互に左側を通行致しませう
二、路上の遊戯を止しませう
三、道路を横切る時は左右を見ませう
四、自轉車は一層注意しませう
五、夜間の乘物は必ず燈火を付けませう
六、路上に色々の物を置かない樣に注意しませう
七、自動車に摑まつてはいけません

石城郡各團体 建築金分負

本年末に移轉

石城郡の各種團体事務所は這般辛ふじて舊平警察廳舍を讓り受ける事となり現事務所に移轉する事となつたにつき三日代表委員會を開き移轉費その他經費三千九十五圓を左記割當にて負擔する事に決定近く着工本年末までには竣工する豫定であると

一千百六十三圓各種團体
九百三十二圓縣費補助
一千圓市村會支會

炭礦稼ぎを目標に 求職者殺倒

他縣各地方から續々 平紹介所の昨今

石城地方は昨今石炭の需要期に向ひ各炭礦は何れも活況を呈して來たため平職業紹介所では郡內七太炭礦その他各炭礦に求人の有無を紹介したところ二百餘名の採炭夫を求めつゝあるので同所では郡內は勿論縣內炭礦、秋田、山形、宮城、栃木、岩手の各縣郡市紹介所に就職者斡旋方を依頼したところ郡內からも他縣からも紹介所の手を經て續々と押かけ毎日十四五人の求職者があり職員は忙殺されてゐる

石城郡で一ケ年の 酒の消費量

移出は三千七百石で 二萬五千石消費

平税務署では管內酒造者の一ケ年間の移出高を調査したところ相馬地方に一千二十二石を初め茨城地方に一千七百七十四石東京に六百五十三石その他郡山須賀川の各地を合せて合計三千六百六十二石で移入した相馬地方百七十八石茨城地方二百七十九石その他郡山福島の各地を合せて二千六百五石で輸入したものより移行したものか一千餘石多い又同郡下における一ケ年間の消費量は清酒二萬二千七十八石燒ちう一千三百六十四石ビール六百八十九石合計二萬四千二百四十一石これを郡内戶數三萬六千五百三十八戶に割當れば一戶平均六斗六升三合人口二十萬四千五百四十八人に割當れば老若男女から幼い子供まで入れて一人當り一斗一升八合を飲むわけになる

入山自治會

十日に開館式

入山炭礦自治會では來たる十日入山炭礦株式會社で新設した自治會館にて秋季總會並に同會館開館祝ひを兼ねて盛大に行ふと

好間名簿閲覽

好間

好間村では九月末日現在選擧名簿の製作を十月末日に終了し五日より十五日迄午前九時より午後四時迄で一般に閲覽に供すと

逃げた女房

平町に潜伏の形跡

茨城縣多賀郡日立字宮田居住鈴木キク(三八)は去月三十日家出し平町に女中となつて潜伏してゐる形跡がある

娘の搜查願

內郷村大字宮字田町大沼長吉娘吉田ツネ(二〇)は去月十三日逃亡したが平町に潜伏してたる形跡があるので實父から平署に搜索方を願ひ出たと

借金の安藤公

減俸。借金。切捨の話

野村一夫

一

これは昔の話である

殿樣からた米を貰つて何不自由もないかの如く見られた封建社會にも「濱口首相」や「井上さん」がゐたようである。

といふのは今を去る百六七十年前寶曆六年のこと、加賀百萬石の家中に減俸問題の嵐が吹きまくつたのである。

一、五百石より以上百石につき拾石宛
一、四百九十石より二百石迄は七石宛
一、百九十石より百十石迄は五石宛
一、百石以下はさしあげに不及候事

右がその減俸の割合である、もつとも形式は減俸でなく諸士より殿樣へ貸上となつてゐる。然しその後安永五年に一度返付されたのみであるから、實質は依然として減俸である。

ところでたゞ今日の減俸問題と違ふところは、被減俸者の態度である。

加賀藩の武士達は君子人であつたらしい。

「累下御勝手御難澁、他國の御借銀莫大になり、もはやなさるべき樣も無之、大切至極の場に至り候。右の趣御家中の面々承知仕候ては、當惑御氣の毒に存じ奉るべきことに候。かくの如き趣に付、せめて御償のため……云々」

右は減俸趣意書である。

つまり、殿樣が借金で二進も三進も行かなくなつて氣の毒だから喜んで減俸して戴こう、といふのである。

だが「喜んで」減俸に應じたかどうかは可成り疑問であるとしても上席判官がつて被減衆を代表して「減俸絶對反對」などといふ騷はなかつたようである。

此の點だけが、今日の官吏と昔の武士との違いでもあらうか。

二

加賀百萬石が借金に惱み始めた時、平ハ殿樣安藤候も借金政策を始めた。

寶曆六年(此の年安藤美濃國より平に移る)東京三河町有馬屋清右工門から借りた金が六百兩、同十年に三千四百兩、同十四年に五百八十兩等々都合當時有馬屋から借りた金は七千兩を越ねてゐる。然も驚くことには此の大金が明治維新迄百年以上も返却されずに殘つてゐたことである。おそらく安藤候の臺所は、此の借金の利拂だけでも毎年容易なことではなかつたらう。殊に幕末平藩の借金は三十四萬兩といふから、平藩が永い間げんぽう問題で苦しめられたことは、容易にこれを想像し得るのである

三

平藩の借金返濟方法は更に興味がある。

「負債償却の法は、すべて證文高の五分の一を以て文文取戻候樣示談のこと、或は文「元金無利息五十ケ年賦に示談致し……永年に償却の事」

右は幕末平藩の勘定方山崎七之丞の手記である

右によると今日流行の「切捨、据置」は、何も今日に始つたことではないようである。

それにしても五十ケ年賦とは何と氣が長いではないか。

平藩に公金を貸した村々をあげると、上荒川村、四つ波村、愛谷村、江組村等々の名が出てくる。何れも平藩に借倒されたり(?)切捨て据置かれたものゝようである。

武士階級對町人階級には今やしかつめらしい武士道は不要「無い袖はかれぬ」の一言で充分である、蓋しまさに亡びんとする支配階級の悲鳴は、常に右の如きものゝようである。

歷史はくり返す、今も亦「切捨御免」の世と見るは如何か。

狂犬豫防

講演會を開催

石城郡では來る十一日から七日間の狂犬豫防デーで大々的に宣傳をなすべくその前にポスターとビラを配布し週間中は野犬一頭を三十錢で買あげ獵友會小學校中學校各種團体と協力して畜犬の整理を行ふ外左の日割で講演會を開催すると

△八日植田町、錦村、泉村△九日川前村、勿來町△十日石住村、荷路夫村山田村△十一日上遠野、入遠野兩村、同十二日渡邊村

四倉有林公賣

四倉

四倉有林の拂下は此程四倉町五反歩を金額二千圓で一日落札した

四倉町の 人口

一戶平均四人

四倉町の戶數並に人口は九月末現在に於て本籍千六十

山寺たより

秋の山寺の紅葉を賞すべく一日の淸遊を試み申し候

李九の名句「秋來なばたづね來て見ん山寺の紅葉たりなす山寺の山を口ずさみつゝ退くに殘念を表し候

十一月一日　山寺にて　大森義一

磐城新聞社御中

ロンドン特信

御無沙汰致居申譯無之候不在中大分變化有之候由聞及び驚き居候本日は松本大使に招かれて晝食を馳走され四方山の話出で佐瀨氏休職(?)の事拜承り候先生も明後十二日には當地出發再び海上の人となる事一週間にして米國に着する筈です十一月二日には更に大平洋上の人となり橫濱に入るはます十一月十八日頃と思ひます

十月十日　ロンドンにて　木村清治

磐城新聞社御中

古河斜坑起工式

平澤社長代理も來山 けふ壯嚴裡に

好間村古河炭礦が二百萬圓の巨費を投じ起工する第二新斜坑の鍬初め式は既報の如く五日午前十一時より鑛業所西脇の新坑口現場に於て擧行された、東京本社より來山した社長代理平澤庶務課長を初め地元好間村長外有志、來賓百餘名に達し定刻一同着席式は吉田神宮の修祓に初まり玉串奉奠り野所長鍬初め式等型の如く壯嚴なる奉式あり湊谷事務部長の挨拶で式を閉じたが新斜坑は深さ三千三百尺で町田橋北に排氣坑を設け入道車道を完備した最新式の採礦法に則る模範的の新斜坑であると

好間陪審員

七名抽籤決定

好間村役場では陪審員抽籤の結果左の如く當選した

北郷市次郎、伊藤庄助、大平正輔、柴野賢吉、猪狩朝重、下野十朗、鈴木久吉

比佐氏演說會

內郷

內郷村大字宮昭和館にて今五日午後一時より代議士比佐昌平氏の政談演說會を催した

ラジオ體操の 感想文

保險局で募集

遞信省簡易保險局では昭和三年十一月一日御大禮記念施設として新に創案した國民保險体操(一名ラジオ体操)の一週年にあたるを機會とし左記の要項で同体操に就ての感想文を募集すると

一、題名、國民保健体操に就ての感想
一、甲紙、半紙又は原稿用紙一行二十五字詰一枚二十行五枚以內
一、謝儀、當方にて輯錄した原稿の執筆者には薄謝を呈す(但し開き封とし二錢切手貼付封皮に應募原稿と朱記する事)
一、住所氏名職業、原稿余白に明記すること
一、締切昭和五年一月末日
一、原稿一切返戾せず

紅燈街 植田の卷

植田繪畫展は何と會つても美人畫が大人氣、殊に植田一の美人をモデルに畫かれた油繪は噂る話の中心で、春の家ふまり子とある、誰が美人だらう?のと畫家の物色にパスしたか、まり子、我こそ美人とウヌ惚れた×××姐さん悲感やら立腹やらへヘイお氣の毒樣與工門女房カサネではないが鏡をアナタ見ましたか!うれし盆踊りかに手に手を取つて踊つたられしさ、忘れ兼ねては、南の空、涙で別れた其人も、數ふる指も寢つ起きつ……るわよと、丸子の大氣焔・蘭がすんでも蒟蒻も三春田人を忘れたつて今少しで來それも忘れようとしても忘れられぬ中村にうれしい旅も粹知らぬた方のた目玉にはお名前が勝利さんでも負けたとやら!

流行の最先端!!
本年流行の 婦人ショール
可愛らしい 子供服
平四 ツルヤ 電一四〇

十一月七日寫眞替プログラム

松竹名作集の秘玉篇 原作 志磨沙良夫 監督 小石榮一 主演……林長二郎決死努力
仇討悲劇 劔の血煙 全
水守宗之助、弟將三郎父の仇討に出て劔の掟のため悲涙極なき仇討劍史

日活太泰超大作現代劇 原作脚色 小林正 監督 內田吐夢 主演……廣瀨恒美 瀧花久子 聲樂家(獨唱)に馴染の松下京子孃出演
海洋捕鯨活劇 太洋兒 全
我等の海洋兒が金華山沖翻戶西の宮海洋を中心として見るも愉快な捕鯨の實況を撮り入れ廣瀨が獨自の神技を發起せしむる本年秋季大作の一

日活作品…原作脚色…異木草二郎 監督 辻吉郎 撮影 松村淸太郎
美劍史 澤田淸 主演
異說 金四郎半生記 全
反逆者、金四郎が戀と自由を得る迄の半生記である、奉行の兒と生れ享けた金四郎は虛僞と儀暴とに生きる武士階級を極度に嫌ひ人間的な光明に向つて進んでゆく近來稀なる日活大作品である

土曜日曜・學生デー 日活 松竹 平館 電四六六

一般外科 泌尿科 婦人科 外科
醫學士 海津俊一
X光線科 木下寅一
院長 新妻由五郎
赤心堂病院 平町田町 電四七五

母シン儀永々病氣加療中之處養生不相叶十一月三日午後三時十分死去致候に付此段辱知各位に謹告仕候

追而來る六日午後零時より同一時迄於自宅告別式相營可申候

昭和四年十一月四日 平町字胡摩澤

男 大河原金之助
親戚總代 小川太森
友人總代 伏見彥衞